

つのキースタイル：漆黒の瀬戸黒(16 世紀後半)

16 世紀後半、「瀬戸黒」、「黄瀬戸」、「志野」という 3 つのスタイルが美濃焼を代表するようになった。最初に登場したのは瀬戸黒で、主に茶碗に用いられた深い黒の釉薬が特徴である。

瀬戸黒は鉄分の多い釉薬で作られている。瀬戸黒は高铁分の釉薬を使い、赤熱した状態で窯から出し、水に浸して急冷することで光沢を出す。また、空気中でゆっくりと冷やすと、よりマットな仕上がりになる。美濃では瀬戸黒以前にも黒い釉薬が使われていたが、穴窯や大窯のように 1200 度の高温で焼成できる窯が登場するまでは、深い黒を出すことはできなかった。

瀬戸黒の茶碗は、初期のものは右の茶碗のように底の部分が少し丸くなっている。後期になると、左のように底の低い円筒形の独特のスタイルになる。その後、この円筒形のスタイルは、美濃焼の中でも「織部黒」と呼ばれる、瀬戸黒と同じ深みのある黒釉と、織部と呼ばれる劇的に非対称なスタイルを組み合わせたものへと進化していった。